

近頃、街で気になることがある。一つは、電車内で扉付近に固まる若者集団である。電車に乗ろうとしても入口付近の一団のため容易に乗り込めない。何とか彼(女)らの隙間から乗り込んでみると、座席の間はガラガラである。何故、中程へ進まないのだろうか。もう一つは、特に関大通りで気になることであるが、道一杯に広がり歩く一団である。自動車やバイク、自転車が来ようとも、そして時には前方から来ようとも意に介さずである。道幅と通行量の問題もあり、広がって歩かざるを得ない面も確かにあるだろう。しかし、問題は車や自転車が来ても自ら譲ろうとしないところにある。先の入口占拠組にしても、問題は他の乗客が降り降りしようとするときに、そつと端による様な行動をとらないところである。

これら二つの問題の根本は、自分の

相手の立場



社会学部助教授

もり
森

た
田

まさ
雅

や
也

存在を他者との関係から捉えることができないところにあるのではなからうか。電車の扉付近に固まることや道一杯に広がって歩くことが、それぞれ他の乗客や他の通行者(車)に対してどういう影響を与えているのかわかっていない、としか考えられない。繰り返すことになるが、入り口付近に固まることや広がって歩くこと自体を何がんばりも止める、というのではない。そうせざるを得ないこともあるだろうからである。しかし、扉が開くときには辺りを見回し、乗降客がいるときには通り道をあけるとか、車が近づいてこないかにも気配りし、その時には道を譲るということとは、社会生活を営む上で忘れてはならない基本的所作であろう。相手の立場に立って考えられないこれらの行為は「自分さえよければよい。」という考えが蔓延し、「思いやり」が欠如する社会へ向かう兆候だと言えれば論理の飛躍であろうか。